

## 第2章 主要課題の整理

## 第2章 主要課題の整理

### 1. 社会動向と時代の潮流

新たな世紀を迎えた今、わが国を取り巻く社会経済情勢は日々変化し、本格的な「少子高齢化社会」「国際化社会」「高度情報化社会」となり、人権の尊重、環境との共生や地方分権に向けた取り組みが求められる状況となっている。

こうした流れを受けて、人口の地域間移動による定住志向や居住地選択の多様化、価値観・意識の変化、家庭・コミュニティの役割の増大、消費生活の変貌、教育と学習の生涯化、居住環境・住宅に対する欲求の質的变化と多様化が予測される。

また、都市計画においても、これまでの右肩上がりの時代における人口増加を前提とした都市の拡大方向から、持続可能な都市づくりをめざして、周辺の自然環境を保全するとともに、周辺自治体との適切な機能分担のもと、効率的なまちづくりへと転換を図っていくことが重要であると考えられる。

本市も同様に、効率的なまちづくりへと転換を図っていくことが重要であると考えられる。

#### 少子・高齢化の急速な進行

日本の総人口は、少子化の進行を要因として21世紀初頭にピークを迎え、その後、減少に転じるとともに、高齢化が一層進展するものと予想される。このため、それらに対応する経済構造の転換や、公共投資の重点化・効率化が求められ、また、高齢者や女性の社会参加を支えるため、就業環境や子育て環境、生活環境づくりを進めるシステムの変革が求められる。

#### 中心市街地の空洞化

中心市街地は、さまざまな都市機能が集まり、新たな経済活動を生み出す場、地域コミュニティの中心として重要な役割を担う「まちの顔」である。しかし、近年、車社会の進展や消費者の行動様式の変化を背景として、中心部の居住人口の減少、商店街の空き店舗の増加、中心市街地の空洞化が深刻化している。

そのため、都市の質的充実をめざしたまちづくり推進の一環として、中心市街地におけるにぎわいや活力の再生が求められる。

### 地球環境問題の顕在化

交通・情報ネットワークの発達により、人・もの・情報が活発に交流し、社会経済活動が地球規模で高度化、広域化するのに伴い、食料、資源、エネルギーの供給制約や温暖化、酸性雨の地球環境問題に対し、世界的規模での取り組みが必要である。

そのため、環境負荷の小さな循環型社会への転換、自然環境の保全、人と自然が共生する社会の構築はまちづくりの重要な要素として挙げられる。

### 国際・広域交流の進展

情報通信技術の飛躍的な発展や交通手段の充実に伴い、住民の意識・行動や企業活動は広域化しており、経済・文化・生活、さまざまな分野において、都市の枠組みを越えた多様な社会連携が生まれている。

そのため、これらの動向を踏まえた都市のあり方や、広域的視点からのまちづくりが求められる。

### 地方分権の進展

地方分権の進展にともない様々な権限が地方に委任される時代において、地域の行政は、地域の住民が自分たちで決定し、その責任も自分たちが負うという考え方へ移行しつつある。

今後のまちづくりにおいては、周辺市町村との連携を図りながら、地域固有の文化・歴史の特性を尊重し、地域ならではの個性と魅力を創出する取り組みが求められる。

### ゆとり・豊かさ志向の高まり

経済的な豊かさの実現や、余暇時間の増大を背景として、人々の価値観が多様化し、社会への参加意識も高まっている。

真の豊かさを実感できる地域社会を実現するため、緑や親水空間、都市景観の創出、身近な都市空間の快適性を重視し、良好な都市環境の形成を図るとともに、まちのあり方を住民自らが考え実践する市民主体のまちづくりが求められる。

## 2. まちづくりにおける分野別の問題点・課題

前項の基本的な課題を踏まえて、本市の現況データやアンケート調査から、まちづくりを進めていくうえでの問題点・課題を以下に整理する。

### (1) 歴史的・自然的な条件

#### <現況および問題点>

- 歴史・文化資源・歴史的行事（祭）といった豊かな観光交流資源があるが、まちのにぎわいに関する市民の満足度は低くなっており、十分な活用がなされていない状況。
- 山林や田畑といった自然的土地利用が市域の約半分を占め、温泉などの豊かな自然資源に恵まれている。
- 特別豪雪地帯に指定されているが、雪は本市にとって生活の一部となっている。



#### ■課題1：まちづくりに十分に活かしきれていない、歴史・文化・自然資源

本市は、歴史的資源や文化資源および自然資源に恵まれており、これからは黒石固有のまちづくりを進めるうえで、重要な要素であるとともに次世代に引き継ぐべきまちの貴重な財産であるため、点在する資源の連携が必要である。

#### ■課題2：冬季における生活環境の向上

こみせは積雪時最もその価値が発揮されるのもであり、冬のこみせは観光資源のひとつであり、また住民に冬場の快適な生活を与えるものである。こみせのある快適な環境のさらなる形成と保全に取り組んでいく必要がある。

### (2) 人口や世帯構成の動向

#### <現況および問題点>

- 年少人口が減少し、高齢化が進展しており、平成7年以降、老年人口が年少人口を上回っている。
- アンケートで、今後も住みたいと回答した人は65%で、20代では40%となっている。
- 人口は昭和55年以降減少傾向にあるが、世帯数は増加しており、核家族化が進んでいる。
- 持ち家率は82.3%と高くなっている。



#### ■課題1：定住化の促進とまちの魅力の向上

20代の居住意向は全体よりも低くなっているものの、4割を超えており、若い人々も本市への愛着があると考えられる。働き盛り、若い世代が定住したくなる都市づくりが必要である。

#### ■課題2：住みやすい環境づくり～少子高齢化対策～

少子高齢化社会に向けて、高齢者が元気に安心してくらすせる環境整備（高齢者の1人暮らし世帯増えているため除雪対策）や、安心して子どもを育てられるような支援を行っていくことが必要である。

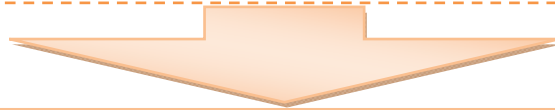
#### ■課題3：人口減少による地域活力の低下

人口減少や核家族化の進行により近所づきあいが少なくなる中で、協力し合うコミュニティを維持・再生することによって地域活力を維持することが必要である。

### (3) 都市環境の課題

#### <現況および問題点>

- 道路整備率は29.3%と低く、長期間未着手となっている都市計画道路がある。
- 国道102号、主要地方道大鰐浪岡線の交通量が多くなっている。
- 高速道路のICや骨格となる道路が整備されており、弘前市まで車で20分と利便性がよい。
- 公園・広場の整備率は高くなっているが、アンケートでは「公園・子供のあそび場」について満足度が低くなっている。
- アンケートによると、生活での主な移動手段は自家用車が最も多い。
- 市街地では、段差が多く歩道が狭い箇所があるため、高齢者や障害者の通行に支障がある。



#### ■課題1：円滑な道路交通の確保

現況の道路網や様々な都市計画道路を見直すことで、円滑な道路交通を促す道路網を再構築することが必要である。

#### ■課題2：歩いて行ける身近な公園・緑地への満足度向上

公園広場の整備率は高いものの、アンケートでは「公園・子供のあそび場」について満足度が低く、歩いて行ける身近な遊び場の充実が必要である。

#### ■課題3：人にやさしいまちづくりを進める

全ての歩行者にとって安全で快適なバリアフリーを意識した道づくりを進める必要がある。また、住環境や都市施設の計画的な整備や、多くの人が集まる場所では、人のにぎわいを生み出すような散策路の整備や一息ついたりゆっくり風景を楽しめる空間の創出が必要である。

### (4) 土地利用

#### <現況および問題点>

- 本市は総面積のうち、山林が62.5%、農用地が18.8%を占めており、平地が少ない。
- 市街地がコンパクトに集約して分布しており、その周りに農地が分布している。
- 地価は下降傾向で、特に商業系用途で顕著である。  
(1997年から2007年の10年間を比較すると商業系用途では約1/3下落している)
- 郊外の大型店舗が撤退しており、今後の計画的な土地利用の誘導が求められている。



#### ■課題1：計画的な土地利用の誘導

豊かな自然と調和のとれた魅力あるまちを目指し、計画的な土地利用の誘導が必要である。また、中心市街地については、歩いてくらせるコンパクトな市街地のメリットを活かし、大都市にはない、黒石の良い部分をアピールしていくことが求められる。

## (5) 産業の動向

### 〈現況および問題点〉

- 大半を占めていた第一次産業が減少し、第二次・第三次産業が増加している。
- 県全体と比較すると、第一次・第二次産業の比率が高くなっている。
- 工業は、事業者数が減少するなか、平成17年には製造出荷額が上昇している。
- 商業は、商店数・年間販売額が減少している。アンケートでは「まちなぎわい」の満足度が低くなっている。
- 農業は、農家数、経営耕地面積ともに減少している。
- りんごの出荷額はあまり減ってはいないが、米は約半分に減少している。



#### ■課題1：中心部のまちなぎわいの再生

市民の「まちなぎわい」に関する満足度が非常に低くなっており、歴史のある「こみせ」の街並みを活かした「誰もが歩いて楽しめる こみせのまち くろいし」の形成をはかることが急務である。

#### ■課題2：主力産業である農業と他産業との連携

グリーンツーリズムの取組み等その他産業との連携により、農業の魅力を高めることが必要である。また、農業生産品の付加価値化・ブランド化といった知名度を高める仕掛けや情報戦略が求められる。これらと平行して、後継者育成や新規農業者の受入れ体制の充実による農業者の確保が必要である。

※グリーンツーリズムとは、都会の人が農村や漁村を主に滞在型で訪れる交流のこと。